

二言語話者の談話における「コードスイッチング」・ 「コードミキシング」の必要性

——英国に住む日本人の場合——

藤 村 香 予

Inevitable Language Outcome: The Use of Code-switching and
Code-mixing by Japanese People Living in London, England

Kayo FUJIMURA-WILSON

Abstract:

This paper illustrates the way in which Japanese people living in England used code-switching and code-mixing in their speech interaction. When speaking in Japanese, they often used English words in order to explicitly describe a meaning of a word in an appropriate context and situation of a conversation. Moreover, the Japanese in England used code-switching for affixing pragmatic meanings to their utterances in both English and Japanese languages. The results showed that their present language environment of English and their language competence encouraged them to use code-switching and code-mixing in both English and Japanese language in their conversation.

1. はじめに

話し手を取り巻く言語の環境は話者の言葉の選択に大きく影響し、海外に住む日本人は現地の言葉と日本語を巧みに使い分けて会話をしている。本論で取り上げる被験者は二か国語を操ることができる「バイリンガル」という定義にあてはまり、日本で教育を受けた母語が日本語のイギリス在住の日本人である。彼らは勉強または仕事の目的で英国に滞在し、英語を日常語とするイギリスの社会で生活をしている。時には日本人の友達や知り合いと日本語で会話をする機会もあり、その際、英語を交えながら話をするすることがあり、英語の単語や文章なくしては日々の生活を語れない様子がデータから窺われる。

これらの言語現象は「コードスイッチング」または「コードミキシング」と呼ばれており、二つの言語を使う環境にある二言語話者「バイリンガル」または複数の言語を使う環境にある多言語話者「マルチリンガル」の間でよく見られる言語現象である。

本稿ではまず、コードスイッチングとコードミキシングについて先行研究でどのように定義され、研究されているかを見ていく。その後、本研究の被験者と調査方法を説明し、実際に録音された会話で被験者がどのようにコードスイッチングやコードミキシングを使用しているかを考察する。また、使用の背景にある要因を議論していくと共に、英語習得に関連付けながら語彙の習

得を環境から考えていく。

2. コードスイッチングとコードミキシングの要因

日本人が日本の社会で生活をする場合、通常日本語だけの環境である。こういった言語環境は「モノリンガル」の環境であり、多くの日本人は日本語しか使えないモノリンガルである。しかし、日本に住む外国人、または海外に住む日本人などは、自分の母語ではない言語が使われている環境にあり、日常においても二言語以上の言葉と接することになる。Thomason (2001) はこのように同時に二言語以上の言葉が使われている言語環境を“language contact”と呼び、二つ以上の言語を使用していると、話者の言語使用に語彙の借用があり、音声学的、形態論的、統語論的、また語彙意味論に影響を与えることがあると述べている。

‘Language contact’の環境では、バイリンガル話者、またはマルチリンガル話者が、二言語以上の言葉を同時に交差して使用することがあり、この現象は「コードスイッチング」と呼ばれている。このコードスイッチングの定義を Gardner-Chloros (2009) は、バイリンガル（またはマルチリンガル）とよばれる話者が、いくつかの言語や方言を同じ文章や会話の中で混ぜて使うことであると説明している。コードスイッチングの原則は一つの会話の中でいくつかの言語が交互に使われることであり、Valdes-Fallis (1977) は“the use of two languages simultaneously or interchangeably”（二言語を同時に交差させながら、交換して使用する）と表現し、Myers-Scotton (1993) は“alternations of linguistic varieties within the same conversation”（一つの会話で様々な言葉が交互に使われる）と記述している。

これまで、バイリンガル話者のデータが多く使われてきたコードスイッチングの研究では、複数言語の交差が様々な形で表れることが示されてきた。例えば、話者が発話の中で異なる言語の単語を織り交ぜて話すことを“single-item switching”というが、同じ現象は“code-mixing”とも呼ばれており、これらの定義は研究者により異なる。コードスイッチングを使用の原因や理由から定義付けする者もいれば、純粹に意味論や統語論から定義をする者もいる。Holmes (2008) は、話者が明確な動機を持ち、文脈や対話をする相手との関係を含めた使用理由で使う場合をコードスイッチングと呼び、コードミキシングはそういった動機付けもなく乱雑に混ぜて話をするものであると定義している。一方、Bokamba (1989) は、語彙の組み合わせ方からコードミキシングを説明し、接頭辞、接尾辞など語彙の構成に関連するものはコードミキシングであると述べている。

また、これまでのコードスイッチングの研究は特にバイリンガルチルドレン ‘bilingual children’ を取り上げたものが多く、バイリンガルチルドレンのコードスイッチングの使用要因はそれぞれの言語における語彙不足を補うためであるとされてきた。バイリンガルは二つの言語を操る者であるが、両言語を学ぶ過程に必要な環境が同じ割合であるとは限らない。そのため、一方の言語で知っている語彙を、必ずしももう一方の言語で知っているとは限らない。例えば、日本で生活するアメリカ人の子供たちは、英語で話す際、コンピューターゲームやお金に関する用語を日本語にスイッチングして話していると Fotos (1995) は述べている。これは日常使う通貨が日本円であり、日本のコンピューターゲームをいつも使用しているからである。

また、コードスイッチングが使われる別の要因として、会話をする相手の言語能力が影響するとも言われている。バイリンガルと呼ばれる話者達は二か国語の知識があり、聞き手はスイッ

ングされても情報の伝達に支障がない。そのため会話の場所やセッティング、聞き手との関係などがコードスイッチングの要因となると Wei (2000) は述べている。これに関して、Kite (2001) は日本のインターナショナルスクールに通う学生を対象にコードスイッチングの調査を行い、会話の相手の重要性を指摘している。学校の友達との会話では英語と日本語を交互に使いながら会話をする学生も、学校の外で面識のない人と会話をするときには日本語しか使わない。スイッチングができる相手であるかどうかの判断はスイッチングを行う大きな要因となる。

更に、談話の中で特別な意味を持たせるためにもコードスイッチングは使われる。Nishimura (1986) は、接続詞をスイッチングすることで発話を強調し、その後の発話に注目させる働きがあると述べ、Fotos (1995) は談話のトピックを示したり、内容を強調させたり、確認したり、話し手の感情を示すためにコードスイッチングが使用されていると説明している。スイッチングすることで、聞き手の注目を集め、その言葉をハイライトさせることができるのである。

このようにコードスイッチングの要因は、話し手の年齢や環境によって様々であるが、日本語を母語とする話者が成人してから海外に数年滞在した場合のコードスイッチングの要因はこれまで明らかにされていない。本研究では海外に移り住んだ日本人がコードスイッチングを使用する要因に着目し、分析と議論を進めていく。

3. 本研究の被験者と調査方法

本稿で取り上げるバイリンガル話者はイギリスに住む日本人である。彼らは日本で高等学校を卒業し海外に進学した者、日本で大学を卒業した後イギリスの大学院に進学した者、またはイギリスで大学を卒業した後現地の会社に就職した人達である。そして今回の分析は、収集した会話の中から、海外での滞在期間が比較的長い者が話している 15 の会話を中心に行う。その理由は最もバイリンガルと呼ばれる者にふさわしく、日本語と英語共にある程度の言語使用能力がある被験者だからである。分析する会話の構成人数は 3 名または 4 名であり、少なくとも 3 年以上は海外に滞在している男女共に含む、20 代から 40 代までの成人である。その内、滞在年数が 5 年以上の被験者は 11 名いた。

また、できるだけ自然な会話を録音してもらうために、会話の場所や時間は本研究のために調整するのではなく、いつもの様に友達と会う際に録音機を持参して録音してもらった。そのため録音場所は様々であり、特に多かったのは一緒に夕食をとるもので、場所は家の中やレストランなどであった。また自然な会話を録音するために録音時間は 20 分以上にしてもらった。こうすることにより、始めは録音されていることを意識して話をするかもしれない話者達を、次第に意識せずにいつものように話をする状態に近づけることができる。会話の録音後は、質問用紙を用意し、被験者の代表に会話の参加者についての情報をできるだけ詳しく記入してもらった。

更にデータ解析では、日本語でカタカナとして使われているローンワード 'loan word' を辞書で確認しながら除き、あくまで「英単語」という概念からコードスイッチングの分析を行った。

4. イギリスでの日本語会話に見られる日本人のコードスイッチング

6 時間以上に渡る会話の中でカタカナやローンワードを除いたコードスイッチングの数は 250 あり、その多くは語彙単位のスイッチング (全体の 88.8%) であった。それに対し、文や節単位

のスイッチングは11.2%であった。

今回の研究データで見られた英語のコードスイッチングの多くは、話者の生活に直接関わる内容や語彙であった。これらのトピックは主に、食に関すること、大学のコース、滞在に必要なビザ、社会制度や習慣などであった。これらのコードスイッチングの使用を見ると、イギリスでの生活を説明するためには英語と日本語を交互に使用することが不可欠であることがわかる。また、それぞれの話者がイギリス人や外国人と学校や会社で日常生活を送っており、コードスイッチングは日々の出来事や英語の会話を伝える手段となっていた。

更に、話者達は談話上特別な意味を持たせる際にもスイッチングを使っていた。言語には‘discourse markers’（ディスコースマーカー）と呼ばれる対話をしている相手とのコミュニケーションを図るための言葉があり、それらは会話の話者達の間接性を表したり、発話に特別な意味を含ますために使用される。例えば、英語の“you know”や“don't you?”といった用語は話し手が聞き手に話しかけ、聞き手との距離を近づけるために使われると Schiffrin (1987) と Holmes (1995) は述べている。日本語にも相手との距離や親しさを表す語彙があり、敬語や丁寧語などもこれらに含まれる。分析した会話では、日本語の語法が談話のストラテジーとして英語の発話に使用され、話者は日本語独特の意味を英語の文章に付加していた。

4.1 語彙の選択とその使用法

会話の中で食に関する話題は非常に多く、そこで話される具体的な食べ物や飲み物には話者が属する社会や文化が深く影響している。今回のデータでも食に関する語彙のスイッチングが頻繁に見られた。

例えば、イギリスは植民地の関係上インドと深い関わりがあり、インド料理はイギリス人が最も好きな外国語料理のひとつであると言われている。そして、イギリスで最も多い外国料理のレストランはインド料理店であり、一ブロックの中に数か所のインド料理店やテイクアウトの店があるのも珍しくはない。そこで、例文 (1) はロンドンに住む被験者達がインド料理店に行った時のエピソードを語っているものである。Midori は特に辛い物が好きで、友達と行ったインド料理店で選んだカレーの辛さを説明する際、実際にレストランで使われていた辛さの度合いを英語にスイッチングしている。この会話の最後には一緒にレストランに行っていない Hiroyuki も「激辛」“extremely hot”と英語で辛さを提示している。日本語でも辛さの度合いを表す語に「甘口」や「中辛」などがあるが、話者達はあえて日本語の語彙を選択せず、現地のレストランで使われる英語の辛さの度合いを表す語彙だけを使用してレストランでの状況を説明している。

(1) Midori : 違う違う違う extra hot じゃない。あの、hot, extra hot じゃなくて、
very hot から始まって。

Hiroyuki : Extremely hot.

次に、飲みものに関する語彙も多く英語でそのまま使われていた。例文 (2) の“still water”はイギリスの水には種類があることを示し、話者は‘fizzy water’や‘sparkling water’、‘carbonated water’（ガス入り炭酸水）ではない天然水の話をしている。日本で売られているペットボトルの水のほとんどは‘still water’であるため、特にどんな種類の水かを明確にする必要はないが、イギリスを含むヨーロッパでは水の種類も多様なため、明確に示す必要がある。これはスーパーや

レストランでも同じである。

(2)Eri：ソーダとかじゃなくて、普通の still water で。

例文 (3) はワインツアーでチリに行った Aki がブドウ農園を回った話をした時の発話である。ここで使われた“vineyard”はブドウ農園のことであり、最初に「ワイン yard (ヤード)」と言った後で、英語に言い換えて繰り返し発話している。繰り返すことや、あえて英語で発話することで語彙を強調する効果を狙っているかもしれない。Coates (1996) は発話の繰り返しの効果について、話者が話のポイントを主張したり、話をしている最中に考えをまとめる働きがあると述べている。

(3)Aki：チリに行っても本当に ワイン yard, vineyard やってるオーナーがいるじゃない。

次に学生の話者は学校での話を共有する場面が多く、そこでも英語の語彙をそのまま使用している。例文 (4) と (5) の発話の話者である Hiroyuki はロンドン近郊の大学で音楽を学んでおり、コースに関する話題の会話で、応募資格“requirement”やイギリスの高等教育機関“higher education”を英語の語彙にスイッチングしている。例文 (5) でイギリス人を表す際に“British (people)”という言い方をしているのも、“English (people)” (日本語で言うイギリス人) はイングランド地方に住む人々だけを表し、英国全体の人を表す用語ではないということを意識しているからである。こういった認識や使用は、現地で実際に使われている語彙の意味を理解し、英語の母語話者の言葉の使用を認識していないとできない。

(4)Hiroyuki：音大っていうかさ、その requirement が。それ minimum requirement って。

(5)Hiroyuki：やっぱね、あの British の奴は higher education になるとお金が出るでしょう。

また、録音した会話では、イギリスに滞在する日本人は現地で生まれぬ限りビザが必要であるため、滞在ビザに関する会話も多く聞かれた。イギリスにおける滞在ビザの取得は年々厳しくなっており、例文 (6) の発話でわかるように、在留資格“residence”が就職しやすいかを左右する。例文 (7) に見られる“home office”は入国管理局のある内務省のことで、イギリスに滞在している日本人は滞在ビザの延長をする際に必ず訪れないといけない場所である。これらの語彙はイギリスに住む日本人の共通認識として英語のまま使用しても支障がないことがわかる。ビザを取ることの難しさを暗示しながら“Home Office”や“residence”, “extension”を英語に交換して発話している。

(6)Rika：でも、たぶん residence 持っている人はこっちでの採用なのかなあ。

(7)Shiho：うん。いや、あの Home Office 以外では extension できないから。

更に、イギリス独特の社会システムや環境に関する語彙も数多くスイッチングされて使われ

ていた。例文 (8) の“gipsy” (ジプシー) は定住せずキャラバンなどで生活をする人々を表し、例文 (9) の“Jewish” (ユダヤ人) はイギリスに在住する異民族を表している。これらの民族に関する語彙の使用は、英国の歴史と文化が深く関わり、多民族社会である現地の状況を表している。

また、例文 (10) では Asda (アスタ) というスーパーに行った話者が、他の日本人にこのスーパーは労働者階級“working class”が行くスーパーであると言われたことを友達に説明している。ここではイギリス社会に階級という考え方が定着しており、日常会話でも話題となることがわかる。

(8)Rika : gipsy になってしまう。

(9)Hiroyuki : あの Jewish のなんて言うんだらう。

(10)Hiroko : Asda って working class の方が行ってらっしゃるとかでしょうって、私日本人だから working class, ま working class。だれにもわかんないですよ。

これらの例文を見るだけで、発話の語彙の選択がどれほど話者が属している社会や、そこで使われている言語と深く結びついているかがわかる。イギリスに住む日本人が自分達の属している社会を表現したり、その社会との関わりを明示するために、コードスイッチングは欠かせない言語現象となっていた。

4.2 皮肉‘irony’とコードスイッチング

日本語の会話なのにあえて英語を使う際、その背景には話者の特別な意図が隠されている。本データでは、日本人の被験者達が否定的な意味や皮肉を伝える際にも英語にスイッチングしていることが観察できた。

例えば、会話では話者の周りで起こった出来事を聞き手に説明しながら話すことが頻繁にあり、今回のデータでも友達に、第三者にどう言われたかを詳しく説明しながら話をしている場面がいくつも見られた。特に英語を母語としているイギリス人との会話で言われた発話は、日本語には訳さずそのまま英語で伝える傾向があった。

例文 (11) と (12) では共に、英語のネイティブスピーカーであるイギリス人の先生に言われた英語の発話をそのまま友達に伝えている。あまり聞きたくない発話を、こんな風に言われてしまったと、異なった言語で伝えることで、発話を強調し、聞き手を注目させることができる。例文 (11) では良い印象を持っていない先生に“*That's not the point.*” (そんなのは大切ではない) と無下に言われ、例文 (12) では指導教官に“*By the way, I'm leaving.*” (ところで、学校辞めるんだけど) と言われたことで、聞き手が驚かされたこと伝えている。

(11)Tae : わたしね、*That's not the point.* とか言われたもんね。

(12)Saeko : そうそう *By the way, I'm leaving.*

また、例文 (13) では、お互いがどなり合う英語の言い合いがあったことを説明し、英語で罵る時に使われる語彙 ‘swear words’ をそのまま使っている。この様に、話者の不快感やショックを表すことにコードスイッチングが使われていた。

(13)Rei : Busters とか言ったら, Xxxx xxx¹. とか言って。

更に、イギリス人に言われた内容の大部分を日本語に訳して伝える際も、イギリス人達が変わった印象を持つものは、話者が言われた通りに英語のまま伝えており、異言語で伝えることでインパクトを与える効果があるようだった。これらは特に日本食に関する発話で確認できた。

日本では日常食べられている食品であるわかめ “seaweed” や刺身 “raw fish” はイギリス人にとっては馴染みのないものであり、気持ちよく思わない人達もいる。例文 (14) では、イギリス人が説明する食材を、大根は日本語に訳しているのに、わかめは “seaweed” と英語にスイッチングしており、馴染みのない変わった日本の食材を丁寧に説明するイギリス人に対する、話者の敬意と皮肉の意味が含まれている可能性がある。また、例文 (15) も初めて梅干しに挑戦したイギリス人が述べた感想を説明する際のイギリス人の発話を、英語でそのまま伝えている。英語の発話にスイッチングすることで、イギリス人の立場で梅干しに対する率直な感想を表現している。更に、例文 (16) に関しては、刺身 “raw fish” を英語で言うことで、発話のトピックを強調し、刺身を頻繁に食べる日本人に対するイギリス人のあまり良くない印象を一緒に伝えている。このように、食文化の違いからくる話者の皮肉や感情を示唆する内容を伝える場面に、頻繁にコードスイッチングが使われていた。

(14)Moto : これが大根で、これが seaweed で。

(15)Hiroko : 梅干しもちゃんと食べて, salty よとか言って。

(16)Megu : なんで raw fish のなんか, そんなに食べるんだとか。

4.3 談話の中のコードスイッチング

今回のデータでは、英語の発話に日本語の語彙がスイッチングされている談話がいくつも観察できた。それらは特に、日本語の語彙の談話上の意味を英語に付け加える効果を狙って、日本語に交換されたものであった。

まず、例文 (17) は話者が話題を変えたいことを英語で述べる際、日本語の終助詞と一緒に付け加えている例である。日本語の終助詞「よ」には発話を強調させたり、会話の参加者に同意を促したりする働きがあり (Cook, 1988), Yoshimi (1997) は終助詞「よ」は会話の参加者達が親しい関係である時に使われると述べている。これを英語の命令文と一緒に使うことで、日本語の談話における意味を発話に付け加え、話者が聞き手に「皆で一緒にしよう」と意志を伝えて呼びかける役割を果たしている。

1 発話記号 Xxxx xxx は聞き取れない発話を表す。

(17) Aki : Change a subject よ。

また、例文 (18) では、英語の注文の言い回しを皮肉り、日本語の丁寧さを表す接頭辞の「お」を英語の注文の言い方に付加して、東京に住む中上流階級の人達の丁寧すぎる言い方を表現していた。

(18) Shinji : お pineapple, please.

このように日本語の会話で談話上の意味を付け加えるために使われる語彙が英語の発話でも使われ、日本語独特の意味を文章に付け加えていた。バイリンガル話者達は、二言語の使用上の意味を習得しているため、それぞれの言語の意味や特徴を生かして交互に使用することで、談話に更なる意味を持たせたり、皮肉ったりすることができる。両言語を巧みに使用することで、例文のようなユーモア溢れた発話を作り出すこともできる。

5. ま と め

話し手が属している社会で使われている言葉は会話をする上で必要不可欠である。本稿では、イギリスに住む日本人の会話で使われるコードスイッチングとコードミキシングを分析し、その使用の背景にある目的と談話上の意味を考察した。日本語と英語の二つの言語の語彙の意味や使用を習得できているからこそできる語彙の使用が多く観察できた。また、コードスイッチングの使用には発話の中に意図する話者の推意 'implicature' も読み取ることができ、談話のストラテジーとして使用されていることも確認できた。

第一に、語彙の選択は話者の属する社会とその中でのある出来事に深く関連しており、話者のイギリスでの生活を述べる際に英語の語彙のスイッチングは欠かせないものとなっていた。第二に、様々な出来事を友達に伝える際、イギリス人達がどのように言ったのかを英語でそのまま伝えることで、発話の内容を強調し、さらに発話に対する話者の印象も示唆することができた。その際、ネガティブな印象も聞き手に皮肉として伝えることができた。第三に、コードスイッチングを使うことで発話に談話上の意味も付加していた。本データのバイリンガル話者達は、英語の発話に日本語の語彙を補うことで、使い慣れた日本語特有の意味を発話に含ませていた。

これらのスイッチングが頻繁に行われるのは、会話の聞き手が話し手と似たような状況の下で、お互いが言語能力と環境を共有できるからであり、二つの言語を共に知っているという認識が、さらなるコードスイッチングの使用に影響しているようであった。

また、話者達が属する社会で話されている言語にできるだけ近づきたいという心理的な作用である 'speech accommodation' (Giles and Coupland, 1991) における心理的収束の誘発 'convergence' (類似) が影響している可能性もある。この「類似」はその社会の一員になりたいという心理がその社会で使われている言語を更に使用させる要因となり、話し手が属する社会への同化を試みるために使われる言語的な現象である (Giles and Coupland, 1991)。

そして、被験者が属する社会の中のある出来事をより正確に伝えるためにコードスイッチングという言語現象は不可欠であることが明示されていると共に、話者達が英語の語彙を文脈や状況の中で正しく習得していることも観察できた。日本で英語を学ぶ際、正しい文脈から語彙を学ぶ

ことは容易なことではないが、語彙習得において意味を知るだけでなく、使われている文脈 'context' を認識することが必要であることは、被験者達の語彙の習得と使用からわかる。また、正しい語彙習得には、社会環境や社会観、言語間の価値観の違いの認識などが影響しており、言葉以外の要素が必要なことも今回のデータから明らかである。

本稿のデータはイギリスでバイリンガルとして育った話者や、さらに数十年に渡って長期的に滞在している日本人話者を含まないため、データの量や内容には限界があった。また、年齢層においても高齢者や年配の話者を含まないため、比較的容易に、言語を含む、環境に影響されやすい若い世代の被験者であったかもしれない。これらに関しては様々な異論があり、さらに多くのデータと研究が必要であることは明らかではあるが、イギリスに滞在する日本人の二言語話者がどのように両言語（英語と日本語）を必要としながら発話をしているかを知る要因の一助になることは確かであろう。

参 考 文 献

- Beauvillain, C. and Grainger, J. (1987). Accessing Interlexical Homographs: Some Limitations of a Language-selective Access. *Journal of Memory and Language*, 26(6), 658-672.
- Bokamba, E. (1989). Are there Syntactic Constraints on Code-mixing?. *World Englishes*, 8 (3), 277-292.
- Cook, H. M. (1988). *Sentential Particles in Japanese Conversation: A Study of Indexicality*. PhD dissertation: University of South California.
- Coates, J (1996). *Women Talk*. Oxford: Brackwell.
- Fishman, J. (1991). *Reversing Language Shift*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Fotos, S. (1995). Japanese-English Conversational Codeswitching in Balanced and Limited Proficiency Bilinguals. *The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 1, 1-16.
- Fotos, S. (2001). Codeswitching by Japan's Unrecognised Bilinguals: Japanese University Students' Use of Their Native Language as a Learning Strategy. in Noguchi, M.G. and Fotos, S. (eds.) *Studies in Japanese Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters, 329-352.
- Gardner-Chloros, P. (2009). *Code-switching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giles and Coupland, N. (1991). *Language: Contexts and Consequences*. Milton Keynes: Open University Press.
- Halmari, H. (2005). "I'm forgetting both": L1 Maintenance and Codeswitching in Finnish-English Language Contact. *International Journal of Bilingualism*, 9(3 and 4), 397-433.
- Holmes, J. (1995). *Women, Men and Politeness*. London: Longman.
- Holmes, J. (2008). *An Introduction to Sociolinguistics, Third Edition*. Essex: Longman.
- Kirsner, K., Brown, H. L., Abrol, S., Chadha, N.K., and Sharma, N.K. (1980). Bilingualism and Lexical Representation. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 32, 585-594.
- Kite, Y. (2001). English/Japanese Codeswitching Among Students in an International High School. in Noguchi, M.G. and Fotos, S. (eds.) *Studies in Japanese Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters, 312-328.
- Meisel, J. (1994). Codeswitching in Young Bilingual Children: The Acquisition of Grammatical Constraints. *Studies in Second Language Acquisition*, 16(4), 413-439.
- Myers-Scotton, C. (1993). *Social Motivations for Codeswitching: Evidence from Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- Myers-Scotton, C. (2000). Code-Switching as Indexical of Social Negotiations. in Wei, L. (ed.) *The Bilingualism Reader*. London: Routledge, 137-165.
- Montrul, S. (2005). Second Language Acquisition and First Language Loss in Adult Early Bilinguals: Exploring Some Differences and Similarities. *Second Language Research*, 21(3), 199-249.
- Nishimura, M. (1986). Intrasentential Code-Switching: The Case of Language Assignment. in Vaid, J. (ed.) *Language Processing in Bilinguals*. London: Lawrence Erlbaum.
- Quay, S. (1995). The Bilingual Lexicon: Implications for Studies of Language Choice. *Journal of Child Language*,

- 7, 337-352.
- Patschke, C, Shirai, J, and Shirai, H. (1999). Sentence Final Particles and Age Difference in Japanese/English Code-Switching. *The 2nd International Symposium on Bilingualism*.
- Pavlenko, A. (2003). 'I Feel Clumsy Speaking Russian': L2 Influence on L1 in Narratives of Russian L2 Users of English. in Cook, V. J. (ed.) *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon: Multilingual Matters, 32-61.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sugimoto, Y. (1997). *An Introduction to Japanese Society*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomason, S. G. (2001). *Language Contact*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Valdes-Fallis, G. (1977). Code-switching among Bilingual Mexican-American Women: Towards an Understanding of Sex-related Language Alternation. *International Journal of Sociology of Language*, 17, 65-72.
- Wei, L. (2000). Dimensions of Bilingualism. in Wei, L. (ed.) *The Bilingualism Reader*. London: Routledge, 3-25.
- Wei, L., Milroy, L., and Ching, P. S. (2000). A Two-Step Sociolinguistic Analysis of Code-Switching and Language Choice: the Example of a Bilingual Chinese Community in Britain. in Wei, L. (ed.) *The Bilingualism Reader*, London: Routledge, 188-209.
- Yoshimi, R. D. (1997). An Expanded Concept of Speakerhood in Japanese Discourse. in Sohn, H. and Haig, J. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, 6. Stanford : CSLI Publications, 583-605.

[2012. 9. 27 受理]